

# 台 湾

## 台南日本人中学校

東京都 羽鳥直之

第二次世界大戦終結の時、中学校一年生であった私は、台南市長官舎から出て、小さな家で、父等と淋しい生活を続けていました。

ある日、市長時代の車夫（人力車の）が、この家に私を迎えに来て、「お父さんが、食事の席に、あなたを呼んでくるようにとっているからこの車にすぐ乗ってください」と言った。

その誘いに応じ、行って見ると、それは、大陸から赴任してきた新しい市長のパーティーの席で、新市長

が自分の息子を呼ぶために車夫に依頼したのに、車夫が間違って敗戦国の市長の息子を連れてきてしまった次第でした。

この事件のとりなしが、どのように行われたかは知るよしもないが、帰途は一人ぼっちで、非常に淋しかったことだけは、今でも強く心に残っています。

台南市長の父が、台湾総督長谷川清氏等と心を合わせて、台湾人の文化を尊重し、台湾の人びとを大事にしているのに、一部の日本人がその反対の行動に走り、台湾人を苦しめている点を知って、私は、非常に不安になり、又、その日本人に対し、いきどおりを感じていました。

それは、終戦近くなつた頃、台湾が、日本本土防衛の最前線となるため、台湾駐屯部隊を強化し、旧満州

から関東軍の精鋭部隊が、台湾に駐屯したのでした。

ところが、その部隊の軍人は、誠に荒々しい軍隊で、台湾人の民家に侵入し、養鶏をかつぱらったりして平気でした。心ある日本人は、満州や中国大陸でやってきた行動を、台湾で実行されては困ると力強く申し立てました。私も中学生でしたが、一部軍人の無差別な行動には、徹底的に抗議していました。

しかし、私達の抗議だけでは、彼等の行動が中止されないで、私達はたいへん苦しんでおりました。

八月十五日の終戦日の後、戦時中に中国本土で日本軍に苦しめられた中国軍隊が台湾に上陸し、日本軍と同様に、台湾在住の日本人婦女や子ども達に乱暴な行為をするとの流言が飛び、私達は困り苦しんでいました。

中国軍に乱暴される前に、自決しなさいといわれ、中学一年生の私の手に両親から一本の短刀が渡されました。中国軍隊の台湾上陸、日本人への乱暴、私の自決等々を考えながら、いつ中国軍隊が上陸するのかと、不安な日々を送っていました。又、その時、日本の軍

人が、台湾人や中国人に親切であつたならば、自分等が被害を受けるはずはないのに、なぜ、日本軍人は、中国人に乱暴をしたのかと、自問自答して苦しんでいました。

その頃、台南赤嵌樓を修復し、台南孔子廟を修復し、尚、また二百年前から、開元祥寺に奉納されている文化的価値の高い立派な鐘を鉄砲玉の金物として供出することを中止した、父の如き態度で台湾人に接していれば、中学生の私が自決する必要などは起こらないだろうと考えたこともありました。

いずれにせよ、八月十五日後、しばらくの間、私は、短刀を眺めながら、いつ、どこから、中国軍や米国軍が台湾に上陸するのであろうかと不安な気持ちで時間を過ごしていました。

一般内地人は、台湾から引き揚げ、内地に帰らされました。しかし、主要な工業群の技術者、高等学校の主要な教授、企業体の運営責任者等は、中国政府に徴用され、家族と共に引き揚げずに残留させられていました。

父は行政官として評価され、徴用され、各地の中国  
人官吏の相談に応じていました。ところが、私の小学  
校中学校時代の大部分の友達を引き揚げ、私は、日本  
人のいない家屋の多い街路で淋しい日を送ってしまし  
た。ある時、父に相談して、自分だけでも内地に引き  
揚げたい、と言いましたが、受け入れられず、又淋し  
い生活が続いていました。

台南市内居住者だけでなく、列車で一時間も二時間  
もかかる、各地に居住する徴用家族の友達が勉強する  
場所として、台南日本人中学校が設けられました。

この中学校の教師は、中国政府に徴用されている優  
秀な人格と技術を持つ大人達でした。彼らが自発的に  
学科を担当し、授業を進めてくれました。したがって、  
平成三年の現代社会からみた場合、学校の形式はとと  
のつていかなかったかも知れないが、教育者としての熱  
情に燃え又、彼の持つ深い学識と高い哲学的識見は、  
中学生の感性の強い私達には、非常に大事な学校の教  
師であったのです。平成三年の現在でもその時代の  
学友が集まり、その時の恩師に感謝の意を表わしてや

まないのではありません。

ここで注目すべき点は、当時、中国政府に徴用され  
ていた先生達は、蒋介石先生の「報怨以德」の精神に  
こたえ、誠実な態度で日本人の持つ産業技術を台湾人  
に伝授して、台湾社会の繁栄に資することが、先生達  
の台湾人、中国人に対する贖罪的行為であると考え、  
一生懸命に徴用の任務を果たしていると語っていた点  
を今でも思い出します。

日本時代の台南第二中学校庭で、数百人の生徒を持  
つ中学校（台南一中、旧二中）と、われわれ数千人の  
生徒を持つ台南日本人中学校とが野球の試合をし、一  
対〇の接戦で負けたが、その野球の試合は、その当時  
の私達中学生の精神生活を物語るよき思い出であった  
と思われます。（注 おおざっぱにいうと、日本時代  
台南一中は日本人が主、台南二中は台湾人が主）

このように、私達中学生の生活は淋しくまた、当時  
としては、将来に対する日本の未来への希望は灰色で  
あった。しかし、その当時は、現実の自分達の健康を  
大切にし、どんな困難に出会おうとも忍び難きを忍び、

勉強にひたすら励んだのであります。

このような毎日の生活態度であつたので、心の底から起こる淋しさを解消し、又、これに克つことが出来たのだと思います。

## 引き揚げ苦勞の体験記

千葉県 石渡 郁子

父が台湾総督府通信部航空課にパイロットとして勤務していた関係で、昭和十年六月、台湾台北市佐久間町で出生。その頃、祖父は浅草で工場を持ち、何人かの使用人をおき、薬剤師として仕事をしておりましたが、母が二人姉妹の長女でしたので、工場を処分して祖父母は台湾へ永住のため、十三年に台湾へ移つてきたのです。その年に祖父は亡くなりました。

その当時は、敗戦なんて夢にも思わなかつたことでしょう。そして終戦を迎え、二十一年基隆から再び内地へと。引揚げでは写真一枚も持たず、きびしい検査

を受け、現金は一人千円、衣類は一人何キロと制限がありました。お金に代わる値打ちのある品物を選び、リュックや、柳行李に詰め、一家そろつて引揚げ、四月上旬、鹿児島県へ上陸したのです。

船中では、船酔いで、何も食べられず、排便もその場でバケツに用をたし、まさに味噌も糞も一緒とはあのことを云うのでしょうか。

鹿児島で一泊、早朝いよいよ本籍地東京へ出発と云う時に一番大事にして持つて来たリュックが盗まれていたのです。両親達はどんなに口惜しかつたことでしょう。苦勞してやっと内地へたどり着いたのに。子供の私でさえそれが良く判りました。そして鹿児島から東京、そして千葉県館山へと休む間もなく夜中にたどり着きました。当時は、内地との通信はままならず連絡不十分のまま、館山の遠縁を頼つて来たのです。そして三か月ぐらいお世話になりましたが、私達のもつて来た砂糖があるうちは良かったものの、残り少なくなつてくるにつれ、手の平をかえすような態度に居づらくなり、山の中の兵舎へと移りました。そこにはま